

一年間で得た成果と課題

社会福祉学部 社会福祉学科 2年
地域福祉コース 山崎ゼミ
豊田嶺

① 自分の成長と気づきについて

私が一週間のサービ斯拉ーニングで気がついたことは利用者である子どもに対しての接し方と利用者との距離感だ。私自身障害児と関わる機会があまりないため、初めは緊張とうまくいくのが心配でしたが職員の方のサポートもあり、徐々に日々成長することである。利用者である子どもに対して私を含めたサービ斯拉ーニングの学生、職員の方が笑顔を絶やさずに接することで子どもにも伝わり、子どもと職員がいい距離感で関わるができる。また、子どもたちがもっている不安などが少しでもなくなると思う。

子どもたちが「楽しい」や「嬉しい」などの感情を表すには少なからず施設の職員や私たちにも関係してくると考える。職員や私たちが子どもたちを楽しませてあげるのではなく、職員や私たちも一緒になって「楽しむ」ことが大切である。

そうすることで、子どもたちにとっては何かをするのに一緒になって楽しめたという気持ちになり、子どもたちに安心感と充実感がうまれる。

また、子どもがもっている「笑顔」を大切にすることで、自然と子どもたちに伝えられるものがあるのではないかと考える。

大人が子どもたちに寄り添いサポートすることで子どもたちと同じ視点から物事を見ることができると、自分自身にとっても学ぶことが多くある。

サービ斯拉ーニングを行って気がついたことは、施設自体が子どもたちのやりたいことを伸び伸びやらせてあげていることや子どもたちの長所を伸ばすことができる環境であると感じた。

子どもには一人ひとり個性があり、施設では、この子のもっている個性を最大限にいかすために職員の方が支援計画を考えている。その子自身の良さを引き出すことで、子どもたち自身も成長していくのだと思い、勉強になった。

また、子どもたちに苦手なことをすぐに克服させるのではなく、少しずつ慣れさせながら経験させることで子ども自身も不安がなく自分自身の成長につながっていくのだと感じた。

② 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

今回のサービ斯拉ーニングを通して、自分の気持ちをうまく言葉にすることが難しい子どもに対してどう向き合ったらいいのかを自分なりに考えると、一番は子どもたちと触れ合う中で、「言葉」は必要ないということだ。

最初はどのよう接したほうがいいのかなど悩みましたが、最終的には子どもたちがもっている

「表情」や「感情」を大切にしていけることに気がついた。自分自身が子どもたちにどう接していくのではなく、子どもたちがもっている表情や感情と一緒に感じてあげること、子どもたちが抱えている気持ちを理解することができ、私自身話すことが当たり前ではないことに気づかされた。

今回の活動を含めて相手の考えや思いをどう受けとめるべきなのかということも学べたように思う。六日間という短い期間でしたが、学ぶことが多くあり、これから自分がさまざまな視点から物事を考えることができる、いい経験になった。

コミュニケーションの大切さ

社会福祉学部 社会福祉学科 2年
地域福祉コース 山崎ゼミ
中本 正則

自分は、山崎ゼミに入りサービ斯拉ーニングの1週間、実際に体験してみて自分は、コミュニケーションの仕方や大切さが分かり、さまざまな方法でソーシャルワークに一番大切に必要なコミュニケーションを学び、その力が成長したと感じました。そして、またそのコミュニケーションをとることが一番難しいということに気づいたのである。

① 自分の成長と気づき

自分は、放課後デイサービスに行き基本的には、発達障害の子どもや知的障害の子どもと施設の中で活動しました。その子どもたちは、コミュニケーションが思うように上手くできなかったり、感情や気持ちを物にあたったり、それで人を叩いてしまう子どもなどがいました。自分は、サービ斯拉ーニングの初日、そのような子どもを見ることは初めてではなかったけれど、施設に何人も同時に子どもたちが来て一斉に動き出し、それぞれが思うように動いているさまを見てまったく体が動かず、まず何をすればいいのか、自分はどう動けばいいのかわかりませんでした。そして、みんなの会で自分たちが紹介され、これから活動するというときに職員の方に「一度子どもたちと遊んで雰囲気を楽しんでごらんと」言われ、子どもの名前も知らない僕たちは、名前を覚えながら自分たちのことをおぼえてもらおうと必死に子どもたちと遊びました。でも、そのときに子どもたちがおもちゃの取り合いや順番を守らないことでケンカが起こるとどうすればいいかわからず、また最初の頃みたいにアタフタするという感じでした。初日は、初めての場所で子どもたちも知らないお兄さんがいる。という感じでした。これからは名前をしっかり覚えてもらえるために頑張ろうと思いました。それから2、3日と積極的に子どもに話しかけながら、その子ども一人一人が好きな遊びや、好きなジュース、また嫌いなものや怖いものや苦手なことなど少しずつ、その子に合ったことをするたびに子どもたちも自分たちのことを覚えてくれていることが分かり、ついこの前来た自分たちに信頼をもってきているようでした。

このときにコミュニケーションをとるということは、ただ話すだけではなく、相手のことを考えている姿勢や興味を持ってきているなど子どもに対して真剣に知ろうという姿勢ややさしくするときや指導をするときのメリハリなどサービ斯拉ーニングではいろいろなことが知れました。コミュニケーションは、話すことだけではないということが分かり、それは普通の人でも同じだけれども、サービ斯拉ーニング先の子どものような子は、そのことを教えてくれる最高の場だと感じています。サービ斯拉ーニング以外でもソーシャルワークの授業などでグループワークなど話す機会が、今年は多く自分は課題などを一人でしてしまいあまり協力をしないと去年から言われています。実際そのところはあまり変わっていないかもしれませんが、自分の最終的に成長しなければいけないところは、そこだと思っています。協力をするだとか、人に助けを求めるなど、それもまた、コミュニケーションだと考えます。施設の子どもはコミュニケーションをとれないのではなく、自分の最大限で相手

に気持ちを伝えようとしていることが分かります。表情や声色など様々な視点から向き合い、わからないことは人に聞き、障害を乗り越えるなどそんなことではなく、障害と共に成長しあうことが自分の成長にもつながるということに気づきました。

② 活動を通して見えた現状と課題

そのサービスラーニング先は、1週間の期間が終わったあともアルバイトとしてお世話になっています。そこでの子どもたちとまた互いに成長できたらしいと感じている。

サービスラーニング先の地域は、愛知県常滑市に属していてまだ施設設立をいってから3年という短い年月である。しかし、そこでは子どもたちを預かるとして実際にサービスラーニングを終えてから、アルバイトを始めて地域とかかわりがあると思ったことを整理する。まず、子どもたちが通う学校の方との協力がある。基本的に特別養護学校から子どもたちを送迎しているが、子どもたちの住む場所、障害の重さなどそれぞれちがうので配慮がされていると感じた。支援学級で、普通の学校に通っている子も多く、送迎のときには、あいさつや学校内にはいるので自分たちの服装やあいさつをするのはもちろん、子どもたちにもしっかりとあいさつをさせるなどマナーを徹底している。一度自分は、あいさつを怠って怒られた時があるのでそれはマナーを徹底している証拠だろう。そして学校はもちろんのこと施設内だけでなく外出をしたときなどにスーパーや公園に行くこともある。

そのときも地域の方に迷惑がかからないようにしているし、公園などでほかの子どもたちといっしょに遊ぶように並び方や、自分のしたい遊具が先に使われていたら待たせるなど、基本的なことが地域活動への配慮につながると考えた。これからボランティアや街をきれいにするプロジェクトなど誰でもできるような簡単な地域活動に参加し、発展していくことで地域に関われたらいいなと考える。

みんなに知ってほしいこと・私がつくりたいもの

社会福祉学部 社会福祉学科 2年
地域福祉コース 山崎ゼミ
前田蓮

① 自分の成長と気づきについて

今年、1年間のサービスラーニングの活動を通して、私が成長したこと。気づいたことについて述べていきたい。

まず、今年から、地域福祉コースのゼミに入り、地域の福祉について学び始めた。今まで福祉の大まかな部分しかわかっていなかった中で、地域に福祉がどう関わっているのかということを知った。

サービスラーニングで、常滑市にある「とっこ子 野花」さんで6日間、活動をさしただいて、たくさんのことを学ぶことができた。

まず、最初にとっこ子さんにお世話になると決まったとき、正直、高齢者福祉の分野に興味があった私は、乗り気ではなかったのが本当のところである。しかし、行ってみると、子ども達はとてもかわいくて、どんどん、障害児施設での活動にのめりこんでいったのである。その中でまず、たくさんの人に知ってほしいと感じたことが、偏見だけで人を判断しないということだ。障害があることはたくさんの人が悪いことだと感じている。しかし、障害があることは個性だ。私自身、昨年の講義で「障害は個性である」という言葉を何度も耳にしてきた。その時はさっぱり何をおっしゃられているのかわからなかった。しかしこの夏休みのサービスラーニングを通して、障害は個性である。ということがどういったことなのか少しわかったように感じた。そして偏見だけで、障害をもっているから、周りの人より劣っているのだといった、差別的な扱いで判断しないでほしいと強く感じた。誰よりも正義感をもった子や誰よりも面倒見のいい子、どんな時でも笑顔な子など、障害があるからと言って、障害がない人より劣っているというこは一切ないと私自身感じているし、障害がない人よりも長けている部分だってたくさんあるのである。障害は個性であり、みんな一生懸命生きているということを知ってほしいと感じた。また、今までわからなかったことがわかるようになったというのは私自身成長したように感じた。

次に、子ども達と触れ合う中で、言葉を交わすことができない子たちだって少なくない。そんな時に、1人1人と向き合うということがいかに大切なのかということがわかった。子どもたちは話すことができなくても何かしら私たちに伝えようとしている。そんな時、私たちが聞こうとしてあげなければいけない。しかし、言葉がなくては理解できないのでは？ いや、そんなことはない。1人1人と向き合うことで、何か伝えようとしていることがわかるようになるのである。このサービスラーニングを通して気づいたことは、1人1人と向き合うことはとても大切だということを知ることができた。

② 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

これから活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について考えていきたいと思う。

私は今回のサービスラーニングの体験を通して一番強く感じたことで、問題であると感じたことは、愛知県では放課後等デイサービスを行っている事業所や、特別養護老人ホームはたくさんある。事業所の代表である徳田さんから聞いた話では、愛知でもまだまだ事業所は足りていないのだそうだ。県外出身の私にとって、愛知県の放課後等デイサービスの数はとてつもない数だと感じていただけに、足りていないと聞いてとても驚いた。それを聞いて私が問題であると感じたのが、私の地元である福井県では、放課後等デイサービスの存在は全くと言っていいくらい存在がない。特別支援学校の数も少ない。放課後等デイサービスなどを求めている人は福井県にだって数多くいるはずである。そんな中で放課後等デイサービスといった事業所がないというのは、大きな問題であると私自身感じた。今回のサービスラーニングで、事業所と地域のことを考えていく中で、自分の生まれ育った地域と比較することにより、自分の地域は他の地域に比べてどうなっているのかということがわかった。

今回気づいた問題に関して私自身、将来的には、地元に戻って、役場の福祉課で働きたいと考えている。福祉課に配属されたら、まず、この問題について、私は考えていきたい。何とか福井県にもたくさんの放課後等デイサービスの事業所を作りたい。これが地域と福祉のつながりのいいきっかけにできるようにしたい。

なぜ発達障害の子どもが増えるのか

社会福祉学部 社会福祉学科 2年

地域福祉コース 山崎ゼミ

和田大樹

① 自分の成長と気づきについて

私はこの一年間のサービ斯拉ーニング活動を通していろいろな体験をして、とても多くのことを学んだ。夏の実習では、児童デイサービスを行っている施設で実習をさせてもらい、発達障害の子どもたちと関わった。最初は子どもたちとどうやって接していいのかわからず、職員が子どもたちと遊んでいるのを眺めているだけで、自分からは子どもたちと関わろうとはしなかった。しかし興味を持って近づいてくれる子どもたちと接して少しずつ子どもたちの個性がわかってきて、次からは自分から積極的に関われるようになった。

サービ斯拉ーニングの実習を通して学んだことは、それぞれいろいろな障がいの子もたちがいたが、その子の障がいを見て接するのではなく、その子の性格を知り、個性を理解することが大切だということがわかった。例えば、同じADHDを持つ子どもでも何が好きだとか、どういうことに対して怒りやすいだとかは違うということがわかる。それは当たり前のことで、とても似ている兄弟でもそれぞれ違った趣味を持っているし、どういったことに怒るのかも違う。

ADHDなどの理由で特別支援にされている子どもも健常な子どもと何の変わりもない。昔では発達障害の子どもでも「障害」とは見なされず、「勉強が遅れている」という扱いだった。ADHDや多動性の子どもでも落ち着きがないと見られていただけで、元気でわんぱくなことされて「障害」とは見られなかった。現在と昔での特別支援学級に入る基準も変わっていて、体に不自由もなく、精神が不安定なわけでもないのに特別支援学級に入れられる子どもが増えている。その理由として、特別支援学級に入る基準のひとつである「LD（学習障害）」とは、知的発達の遅れは見られないが、特定の能力に著しい困難を示すものです。また、ADHD（注意欠陥多動性障害）とは、発達段階に不釣り合いな注意力や衝動性、多動性を特徴とする行動の障害。」この項目に当てはまり在籍する子どもが増えてきている。実習先の施設長と話をして、だいたいの人が子どもの頃はADHD基質を持っており、それが増えなかっただけで誰もがADHDになる可能性はあると聞いた。確かに自分も昔は落ち着きがなく、注意散漫でいろいろな問題を起こしていた。もしも今の世の中だったら私も障害になっていたかもしれない。そう考えると発達障害の子ども、健常者も何も変わらず、周りの人がどう捉えるかだと思ふ。

② 活動を通して見えてきた地域や市民活動について。

現在の日本の環境は発達障害の子が増えやすい環境になっているらしい。先ほどの特別支援学級に入る基準でLDやADHDに当てはまる子が増えてきているが、「少しの勉強の

遅れ」や「落ち着きがない」と言われている子も成長していくにつれその問題はなくなっていくし、なぜ発達障害の子が生まれやすい環境になってしまったかを自分なりに考えてみたら今の世の中がその子たちを簡単に「発達障害」という四文字に片づけている気がする。

学校の教師や保護者が他の子の勉強の邪魔になる子や注意散漫な子学習が追いついていない子を理解できない子としてみて、その子のことを知ろうとせず理解できないから特別支援学級に入れていると思う。また、学校の教師も子どもたちのことを真剣に怒ってくれる先生は減り、ちょっと手をあげたら保護者や教育委員会から体罰とされることが関係していると思う。そういった教師が減ったのも特別支援学級に入れられる子どもが増えている原因の一つだと思う。これも現在の日本の環境が作り出している問題であり、特別支援学級に入れられる子や、発達障害の子がなぜ増えているのかその子たちがどういった子たちなのかをみんなが知ろうとすることが大切である。

私が実習に行った施設では職員みんなが発達障害の子それぞれの性格を理解し、発達障害についての詳しい知識を持っていた。そこでは ADHD 基質を発散させるための遊具があり、普段、親や先生が止めるような遊びをさせていた。私は今の世の中でこのような施設が増えてほしいと感じた。そして地域でこの問題を解決していくべきだと思った。